

魔法の言葉 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名:谷口公彦

所属:香川県立高松養護学校

記録日:H30年 2月28日

キーワード: 肢体不自由、成人、周囲との連絡手段

【対象者(本事例は成人)の情報】

・**年齢** :47歳男性。高松養護学校高等部卒業時より、身体障害者の入所施設で暮らしている。

・**障害名** :脳性麻痺(肢体不自由、構音障害、聴覚障害)

・障害と困難の内容

【肢体不自由】・床上での座位困難。移動は電動車椅子使用。床上での寝返り移動が可能。

- ・手指での事物の操作は困難だが、固定されたパソコンやリモコン、携帯電話のキーボードを指で押すことが可能。年々細かな操作の負担や疲れが増していると思われる。

【構音障害】・発話、呼気のコントロールが難しく発音不明瞭。日常会話は口頭で可能だが、聞き取りにくさなどから時間がかかったり、伝わりきらなかったりすることもある。

【聴覚障害】・左耳難聴があり、話しかける方向や声量に配慮が必要。

【活動目的】

・当初のねらい

- ・今の携帯電話でできている活動を失わず、新しい端末への乗り換えを行う。
- ・「今よりも少し便利で希望を叶えやすい生活」を手に入れるためのICT機器活用を含むコミュニケーションの方法を提案する。

・**実施期間** 平成29年5月末～平成30年1月末

・**実施者** 谷口公彦、佐野将大(研究協力者)

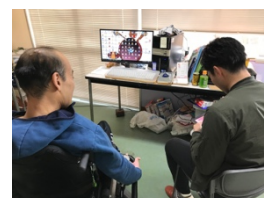
・**実施者と対象者の関係** 知人。10数年前より支援機器のサポートをボランティアで行なっている。

【活動内容と対象児の変化】

・対象者の事前の状況

1. 生活や活動の状況

- ・在学中よりワープロやパソコンの使用に取り組んできた。上肢障害があり、キーガードやトラックボールマウス、パソコンのアクセシビリティ機能を組み合わせて使用が可能。
- ・主にイラストや年賀状の作成、ゲーム、インターネット、メールに利用している。
- ・隣接するリハビリテーションセンターで行われる、電動車いすサッカーのチームや水泳教室に通う。付き添いのボランティアが見つからず、対外試合や遠征に参加することができないことも多い。
- ・20年以上、パソコンの操作補助やスキルアップを目的に大学生アルバイトを使っていたが、数年前より途絶えている。



2. 本取組に関わる事前状況

(1) 初めての携帯電話を購入(12年前)

- ・端末購入や機器設定、環境整備は報告者や研究協力者によるサポートを受けた(報告者を中心とした支援サークル「ATサポート研究会」の活動)。
- ・それまでの施設職員に援助してもらいながらの公衆電話での通話に比べ、時間制限や頻度の改善、通話相手や内容といったプライバシーの確保ができるようになった。



(2) 携帯電話導入以降の状況変化

- ・10年以上経った現在も携帯電話の端末や周辺機器に更新が行われていない。
- ・これまで何度か新しい携帯電話への乗換えを検討したが、今できていることをそのまま維持したいという希望や、新しい機種の手操作が自分にできるのだろうかという、取り換えの不安などから実現しないままになっていた。
- ・10数年が経ち、携帯端末の主流がスマートフォンに移っており操作環境が変わってしまう可能性が高いこと、A氏が必要としている周辺機器もスマートフォン対応のものばかりになってしまったことなど、状況が大きく変わっている。
- ・A氏から携帯電話が壊れる前に、スマートフォンへの乗換えをサポートしてほしいとの依頼が届いた。

・活動の具体的内容

取り組んだ内容は大きく以下の3つである。順に取組について報告する。

1. A氏のICT機器活用(主として連絡手段)と、友人・知人とのコミュニケーションの状況整理
2. 連絡手段の最適化による「今より便利でいける生活」への提案・試行
3. スマートフォン(またはタブレット端末)の操作設定や環境の検討、端末の買い替え

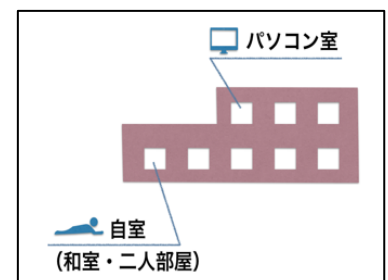
1. A氏のICT機器活用(主として連絡手段)と、友人・知人とのコミュニケーションの状況把握と整理

- ・報告者は、これまでのA氏との付き合いの中で、様々な困りを感じていた。機器活用が必ずしもA氏の希望する活動の実現の役に立っていないのではと感じていた(ボランティアを募ってスポーツクラブの練習や遠征に参加する、知人と面会するなど)。その状況や困難の要因を確認・検討した。

(方法)

- ・A氏が主に活用している携帯電話のメールと通話、パソコンでのメールのやりとりについて、A氏にインタビューを行い、報告者や研究協力者が感じていることと比較した。

※携帯電話は自室(施設1階和室)の枕元にあり臥位で操作。パソコンはパソコン室(施設2階)に設置してある私物パソコンを電動車いすに座って操作。



(結果)

(1)メールの利用

A氏側の状況	報告者側の状況
・携帯電話での文字入力が大変になってきた。必要性や楽しみよりも操作の負担の方が大きくなってきている。 ・携帯メールが届いても、つい返信が遅れたり忘れてしまったりする。 ・パソコンメールは、携帯メールみたいに通知が届かないのでついチェックを怠ってしまう。 ・広告メールがたまっていて、必要な新着メールが見つけられない。	・時間にとらわれずに連絡が取れるので、用件はメールでやり取りしたい。 ・携帯やパソコンにメールを送るが、返事が来ず困る。読んでいるのかも不安を感じる。 ・一方で、メールを送ったことに安堵して、返事が来なくても放置してしまう。 ↓ ・頼まれたことの解決や、情報提供が滞る。

(2)通話の利用

A 氏側の状況	報告者側の状況
・一番直接的で便利に感じている手段。 ・相手が出てくれない、用件を伝え終わる前に切られてしまうことも多い。 ・十分使えていない状況だが、離れて暮らす父親と連絡して安心を得たり、ボランティアを探したりする手段として必要不可欠。 ↓ ・依然として施設外の人と連絡を取る主な手段と捉えている。	・ズレなく会話を進めるのに時間がかかる。 ・「ついでに」と出てくる話題が多く、電話が終わりそうで終わらない。 ・途中で切るのも気が引ける。 ↓ ・長電話になると思うと、かかってきても「受けられない」「受けない」が増える。 ・掛けなおそうとするが施設の生活時間や自分の時間の都合も重なり、連絡が途切れる。

(3)面会の利用

A 氏側の状況	報告者側の状況
・食事や入浴、身体介護の時間以外なら大きな問題はない。 ・直接話せるので助かる。	・メール、通話に比べて、会話がしやすい。 ・しかし、通話と同じく「時間がかかる」ことがネックで、面会頻度はすぐに下がる。

(状況整理)

- ・導入当初と比べて、実際に使っている用途や機能は限られてきている。
- ・A氏と報告者で、それぞれの手段の使いやすさ使いにくさが大きくずれている。その結果、連絡自体が滞ってサポートが放置されたり、やりとりが途切れたりする状況が生じている。
- ・ATサポート研究会のサポート活動も、メンバーの職場での役割増加や、結婚、引越しなどの生活変化によって活動から離れるものが多く、サポート力が激減している。

2. 連絡手段の最適化による「今より少し便利でイケてる暮らし」の提案、試行

(1)メール、メッセージの活用状況の改善（連絡手段のメインに）

①パソコンのメールの受信 BOXなどを整理した。

- ▶広告メール・メールマガジンの解約、メールの振り分け設定、迷惑メールのブロックの方法を一緒に行うことで、メール確認の難しさを解消した。

②携帯電話での文字入力の問題をパソコンで代替できるようにした。

- ▶魔法のプロジェクトで借りた iPhone を自室の枕元に設置した。携帯メールの代わりに、スマートフォンとパソコンの両方で使える Facebook メッセンジャー、LINE を導入し、メッセージ送信や返信を長年慣れているパソコンからもできるようにした。

③メッセージの着信確認は自室の iPhone で、返信は2階のパソコンでするようにした。

- ・自室に置いた iPhone の設置方法を工夫し、着信通知の確認と大まかな内容確認ができるようにした。（右上写真）。
- ・返信はパソコンから、当日、または翌日に返してもらうことにした（右下写真）。また、メッセージが届いたら何らかの返信をするよう互いに約束した。
- ・自室でもスタンプか定型文で簡易な返信を練習してもらった。



(2)面会手段の改善

・最大のネックであった「時間がかかる」こと自体を取り去ることにした。具体的には以下の3つである。

- ▶1回30分の短時間訪問とする。長くても60分で切り上げる。
- ▶その分、面会の頻度を上げる(月2回前後)。
- ▶特に用事がなくても、一定の頻度で通ってみる。

(3)通話の改善(詳細な用件の交換は行わず、声を掛け合う雑談的な位置づけ)

- ・面会と同様、30分以内の短時間通話を提案した。
- ・その代わり、A氏からかかってきた電話は可能な限り受ける。またその日のうちに掛け直す約束とした。

3. スマートフォン(またはタブレット端末)の操作設定や環境の検討、端末の買い替え

- ・本プロジェクトで借用したiPhoneとiPad miniを使って、アクセシビリティ設定、固定具を試す。
- ・その結果を考慮して、購入する機種、必要な周辺機器の購入を進める。

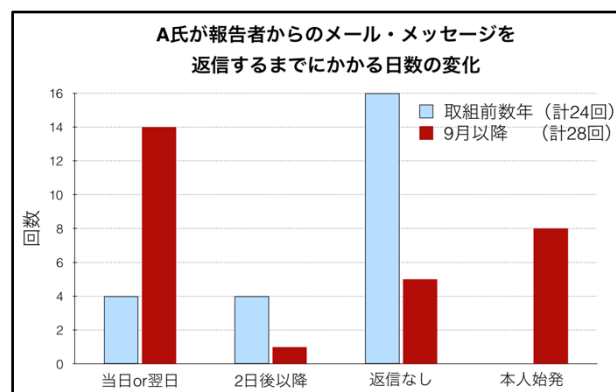
・対象者の事後の変化(報告者側の視点から)

(1)メール、メッセージの活用状況の改善

9月より連絡手段の新しい方法を試行し、間も無くその成果が現れた。返信の途切れが解消しやりとりのペースが上がった手応えがあった。A氏と私との、Gメール・Facebook メッセンジャーでのやりとり履歴から、A氏が返信に要した日数をグラフ化した(右)。

▶取組前約3年間のやりとりの履歴では、多くが「返信なし」で、やりとりが途切れていることが読み取れる。また、A氏から始まるやりとりもない。メールが連絡手段として役立っていないことが分かる。

▶現在のスタイルを導入した9月以降の4ヶ月の履歴では、当日や翌日の返信が増え、返信なしが大幅に減った。また、A氏始発のやりとりも見られる。



目新しさによる意欲向上や、期間の違いなどで厳密な比較にはなっていないが、この結果から、メールやメッセージが、再び生活時間ややりとりに要する時間のズレを補ってくれる連絡手段になったと捉えている。

(2)面会手段の改善

- ・平日なら勤務終了後の2～3時間、休日なら約半日の予定を空けることが報告者には負担だったが、30分と決めたことでその段取りがほぼ不要になった。
- ・サポートも「今日は、機器を設置するだけ」「様子を聞くだけ」「修正を試すだけ」と細切れになったが、その分、「2週間試す、不具合があれば連絡する」など、サポート進行の中でのA氏の役割が生まれた。
- ・また、用事のない時に通ってみたことで、「今日しなくてはいけないこと」に迫られない分、得られるA氏周辺の生活への気づきや情報が増えた。
- ・訪問は9月から1月の5ヶ月とも月3回実施でき、報告者は、それに伴う負担感をほとんど感じなくなった。

(3)通話の改善

- ・実際に通話を使うことはほとんどなかった。メール環境や面会の改善で必要性が下がった可能性がある。

- ・A 氏に聞いたところ、通話は月に1回、父親との会話に使う程度になっているそうである。

以上の変化から、今回の連絡手段の検討と変更によって、A 氏の連絡手段が便利になり、ICT 機器の活用も促進されたと言える。

「3. スマートフォン(またはタブレット端末)の操作設定や環境の検討、端末の買い替え」について



- ・iOS のアクセシビリティ設定で、タッチ調整や、福祉センターから「Hook +」を借用して外部スイッチの導入の検討を行っているが(右写真)、誤操作が解決できず、今現在も自室で横になった姿勢での自立操作の環境が確定していない。
- ・Facebook や LINE の通知機能を使った今回の環境が実現できる端末を、年度末を目処に購入する予定である。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

「A 氏本人にとっても、今回の連絡手段の見直し、A 氏の今より便利な生活に繋がり、希望する活動の実現に役立ったと言えるのではないかな」

・エビデンス

A 氏が毎年取り組んでいる「年賀状づくり」のエピソードを示す。

(状況)

A 氏は、パソコンのスキル向上や活動補助のために、20年ほど大学生アルバイトを雇って支援を受けている。しかし長年続いた学生アルバイトが2年前に途切れ、年賀状作成にも大きな支障が生じていた。

①昨年度の取組の経緯

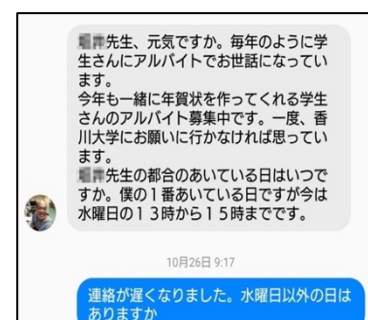
- ・9月に、「年賀状作成を手伝ってくれるアルバイトを探して欲しい」と報告者に相談があった。
- ・報告者を通じて A 大学の S 教授に協力を求め、一度、直接会って打ち合わせをすることになった。日程の調整を A 氏と S 教授ですることになった。しかしメールのやり取りは途絶え、打ち合わせの日程が決まらないままになった。
- ・S 教授から「大学の会議や授業のない金曜日の午後」と具体的な提案があった。しかし今度は「毎週金曜日はプール教室があるので無理」との A 氏からの主張があった。私が「A さんからの依頼なのだからプールを一回休むべきではないか」と指摘したが譲らず、結局話自体がうやむやになってしまった。
- ・結局、報告者が大学に駆け込んで大学生に声をかけてアルバイトを見つけ、急場をしのいだ。



②今年度の取組の経緯

- ・10月末、自発的に A 氏から S 教授に Facebook メッセンジャーで協力を依頼し(右写真)、早期にアルバイトが見つかる。
- ・連絡用に A 氏、大学生アルバイト、報告者の3人でグループチャットを作ることを提案した。A 氏も「後々自分でできないといけないので自分で作ってみたい」と積極的であった。
- ・Facebook メッセンジャーの利用が軌道に乗っていたので、全体の進行役を A 氏に委ねた。メッセージでのやりとりに不慣れなこともあったが主体的に連絡を取ることができ、12月下旬には無事に年賀状が完成、投函できた。

- ・A 氏に「今年の年賀状の取組は連絡も含めてバッチリ、ご自身でやり遂げましたね」と声をかけると、満面の笑みであ



った。「今までよりもイケてる」達成感を持っていることが感じられた。

③その後

・年賀状アルバイト終了後、年賀状アルバイトを引き受けてくれた大学生に、引き続きパソコンアルバイトを頼むため、A氏自らS教授に了解と協力を求める連絡をとった。また初回の打ち合わせに報告者に参加を依頼し、日程調整に主体的に取り組んでいる(右写真)。良い状況が継続している。

これらの経緯から、今回のICT機器活用の見直しによって、当初の取組のねらいであったA氏の「今よりも少し便利で希望を叶えやすい生活」を実現できたと捉えている。



【考察】A氏との実践から報告者の教育活動を省みる ～気づかぬうちに取組の主体が入れ替わる生活状況～

(実践の振り返り)

昨年と今年の年賀状作成の取組の差について考察した。機器を用いた連絡手段の見直しが状況の改善の要因となったことは確かだが、それ以外にも、サポートの進み方がA氏の行動に影響したと捉えている。

これまでA氏へのサポートを振り返ると、サポートはA氏の依頼から始まるが、それ以降は報告者が、情報を集め機器を支援し、A氏に「これでいいですか？」「AとB、どちらにしますか？」と尋ねながら進めていた。背景には時間の節約、解決を急ぐ事情があるが、本来の主体であるはずのA氏は常に提示に答えるだけという従の立場にあった。



生活の中で「取組の主体が支援者に移ってしまう」状況の積み重ねがあったと想像すると、そのことが昨年度S教授とのメールが途絶えた時の再連絡がA氏から行えなかった要因になったと考えられる。またプール教室を休まなかったことも、休みたくなかったということだけでなく、休むことに伴う連絡や段取りに困難があったとも考えられるのではないかな。

それに比べ、今年度は連絡手段が修正・準備されたことに加え、図らずも取組の主体をA氏に明確に委ねたことが、A氏の主体性を引き出し、本来持っていた行動力を発揮させたと考える。さらに年賀状作成がうまく運んだ経験が、その後の「パソコンアルバイトを頼みたい」という希望に対する主体的な発想や行動に繋がった可能性がある。

またA氏の「自分でやりすぎてしくじったらいけないと思った」という振り返りの発言から、成功経験、失敗経験両方の不足がさらに主体的な行動に抑制をかける状況も垣間見える。

(教育活動を省みて)

私の教育活動に照らしても、無意識のうちに、学習や課題解決の主体が教師である私に移っていることがしばしばである。それは時間の制約や、授業をスムーズに展開したいという気持ちが影響している。しかし、今回の実践を踏まえ、生徒たちが大人になった時の状況を考えると次のようなことを大切にしたい。

- ・教育活動全部ではないが、生徒が主体となって動きながら学ぶ機会を守ること
- ・そのために、教師の立ち位置を点検すること
- ・しくじりや試行錯誤を許容できる時間を確保すること
- ・生徒が主体的に活動できるための手段を一緒に準備していくこと

生活活動の随所に援助を必要とする肢体不自由のある生徒にとって、大人の動きを見て、待ってから行動することの効率の良さや、好意から与えられる先周りの支援を断ることのストレスがあることを考えると、受動的な行動方略を否定はできない。しかし、そのことによって身につけられない深い経験や知識、生活スキル、成長があることを考えると、やはり行動の主体となる学習環境、将来の生活環境であってほしいと改めて願う。